東北工業大学新技術創造研究センター紀要 EOS
Vol.25 No.1 p.129 ～ p.136, 2012

語りと記憶のプロジェクト

プロジェクト代表者：堀　江　政　広[1)]
プロジェクト参加者：坂　田　邦　子[2)]・大　久　僚　一[3)]・矢　作　佳　織[3)]・
黒　澤　雄　馬[3)]・瀬　野　拓　海[3)]・大　内　香　奈[3)]・
阿　部　　純[4)]
プロジェクト連携先：東北工業大学ライフデザイン学部
クリエイティブデザイン学科堀江研究室

Stories and Memories Project

Abstract

By the Tohoku earthquake, we lost many things. The “ Stories and Memories Project” is intended to convey the things that will be talked about at the event to the future, through sharing peaceful time in a space among those who have had the similar experiences in the Tohoku earthquake.

After The Tohoku earthquake, the things that had been taken granted until then turned to be the things that cannot be taken granted, and the “daily life” came to be reviewed again. Through the thought felt at that time, the experiences that cannot be experienced usually, the important activities that are not taken up by the media, one’s own action, and the experience on the border of the usual and the unusual things, we should have noticed “something” that had been usual before. In this project, we’ll look back the events that happened after March 11 through the “talk”, and will archive them. And, we wish this will re-examine the relationship and the community that are the basis of the human activity, and will take the role of joining this with the next generation.

1．目　的

東日本大震災により，我々は多くのものを喪った。「語りと記憶のプロジェクト」では，東日本大震災で似たような経験を持つ人々同士が，ひとつの空間で語り合うことにより安らぎのひと時を過ごし，その場で語られたコトを未来に伝えていくことを目的としている。

東日本大震災後，それまでは当たり前のことが震災後は当たり前ではなくなり，「日常」というものをもう一度見直すことになった。あの時に感じた思い，通常では味わえない体験，メディアでは取り上げられないが重要な活動，自分自身の行為，日常と非日常の境目を経験することを通して，我々は当たり前だった「何か」に気付いたはずである。３月11日以降に起こった出来事を「語り」から再確認し，アーカイブする。そして人間活動の基盤となる関係性やコミュニティなどを見直し，次世代へとつなぐ役割を目指したい。

１）東北工業大学ライフデザイン学部クリエイティブデザイン学科　准教授
２）東北大学大学院情報科学研究科人間社会情報科学専攻　講師
３）東北工業大学ライフデザイン学部クリエイティブデザイン学科４年
４）東京大学大学院学際情報学府　博士課程４年

2．活動内容と成果

2011年度は，計7回の語りの場を設けた。各回共，参加者が語りたい・語りやすいテーマの設定とそれに合った会場デザイン，および告知のためのポスター・フライヤーとWebサイト（http://horie.design.tohtech.ac.jp/311memory/index.html）の制作をした。

参加者にはテーマに添った内容をハガキ大のカードに自由に書いてもらい，それらのカードを貼る地を用意した。参加者はカードに書いたことをきっかけに，他参加者やファシリテーターに自らの体験や思いを語った。カードに書いた内容を伝えること，そこから広がりカードに書かれていないことについて語られた。参加者同士で語りの内容に共感し合い，知らなかった出来事と思いを聞くことにより，新たな気づきが生まれた。

2.1.「語りと記憶のカフェ」

テーマ：あの時の食を聞かせてください
日　時：2011年7月31日
会　場：東北工業大学長町キャンパス（宮城県仙台市）
主　催：語りと記憶のプロジェクト
参加者：オープンキャンパスに来場した高校生とその保護者
内　容：参加者はお茶とお菓子を楽しみながら，カードに震災時の食に関するエピソードを文字と絵で書き，そのカードについて語った（図1左）。参加者の作ったカードを宮城県とその周辺の白地図に貼り，場所によるカード内容の比較を行った（図1右）。カードの総計は47枚（30人）。普段は手に入ることが当たり前だと思っていたモノが，なかなか手に入らない辛さについて参加者は共感していた（図2）。

図1．「語りと記憶のカフェ」の様子

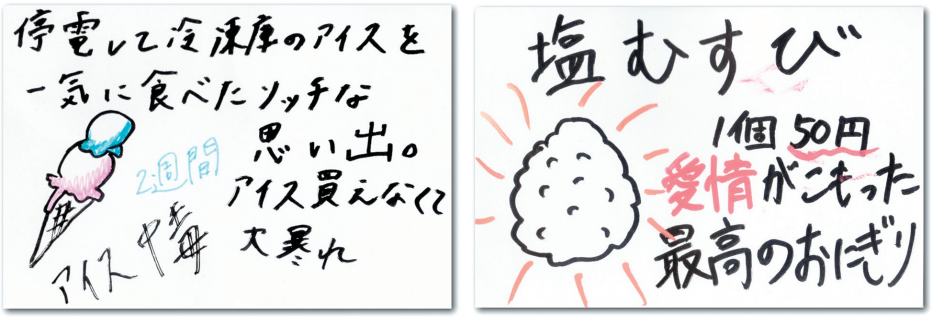

図2．震災時の食の語りのカード

2.2.「語りと記憶の芋煮会」

テーマ：あなたの震災ボランティア体験を聞かせてください
日　時：2011年10月7日
会　場：木の家（宮城県仙台市太白区秋保町湯元）
主　催：語りと記憶のプロジェクト
参加者：震災ボランティア活動経験のある東北大学学生および東北工業大学学生
内　容：参加者は芋煮を食べながら，カードに震災ボランティア活動に関するエピソードを文字と絵で書き，そのカードについて語り合った（図３左）。参加者の作ったカードを「喜怒哀楽」のエリアに分けた地に貼り発表した（図３右）。カードの総計は126枚（20人）。「脱藩」と書いたカード（図４）は，ボランティア活動のために休学することを「脱藩」と仲間内で呼んでいたことから書かれたものである。このカードについての語りは，「ボランティア活動に熱中していくごとに，大学生活，学生のあるべき姿からどんどん離れていく，その生き方がいけないことではなく楽しいことだと思いました」というものだった。

図３．「語りと記憶の芋煮会」の様子

図４．「脱藩」と書かれた語りのカード

2.3.「記憶をつむぐ，言葉をつむぐ」展

テ ー マ：あなたが未来につむいでいきたいものは何ですか？
日　　時：2011年11月4～9日（6日間）
会　　場：せんだいメディアテーク（宮城県仙台市）
主　　催：語りと記憶のプロジェクト／I, CULTURE プロジェクト
助　　成：野村財団
取材協力：Date FM「What's new SENDAI」
協　　力：宮城県亘理郡山元町／東北大学大学院情報科学研究科メディア文化論研究室／東北工業大学ライフデザイン学部クリエイティブデザイン学科堀江研究室／東京藝術大学美術学部先端芸術表現科木幡和枝研究室／一般社団法人 MMIX Lab
参 加 者：来場者
内　　容：会場では，山元町ふるさと伝承館機織り教室の作品の展示と，I, CULTURE プロジェクトの作品展示をし，来場者は機織り体験と糸紡ぎ体験をしてもらった（図5左）。来場者にテーマに関するモノ・コトをカードに書いてもらい（図5右，図6），それについてスタッフに語ってもらった。カードの総計は120枚（展覧会来場者400人）。震災の中で家族と過ごしたこと，周りの人とどのように連携をとったかなどが「これからにつむいでいきたいこと」として多く語られていた。

図5．「記憶をつむぐ，言葉をつむぐ」展の様子

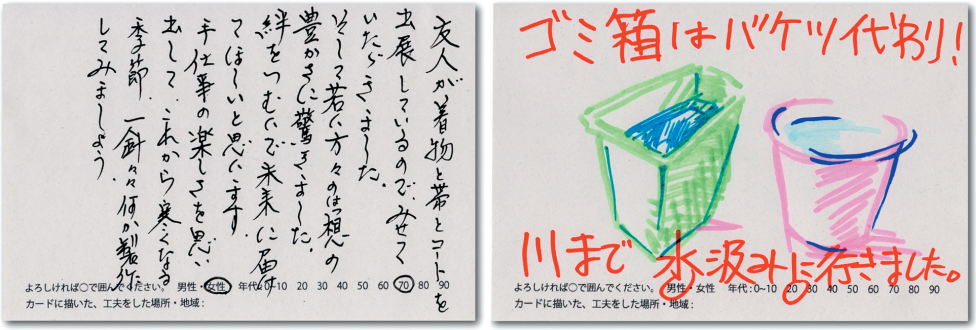

図6．「未来につむいでいきたいもの」のカード（左），「工夫したこと」のカード（右）

2.4.「音楽と語り」

テーマ：震災であなたの音楽は変わりましたか？
日　時：2011年11月26日
会　場：仙台 BAR TAKE（宮城県仙台市）
主　催：語りと記憶のプロジェクト
参加者：アーティスト（４組），来場者
内　容：２部構成で実施した。１部は仙台を中心に活動しているアーティスト４組のライブ演奏を行い（図７左），２部はアーティストのメンバーと来場者がテーマに関することをカードに書き，語り合い（図７中），「震災前・震災後」に分けた地にカードを貼付けて共有した（図７右）。カードの総計は39枚（30人）。来場者からは，「震災前はただ音楽を聴くのが好きだったが，震災後はライブに行って演奏を聴くのが楽しくて大切な時間だと思った」といった語りがあった。アーティストからは，震災前は自分の為に歌っていたが，震災後には他の誰かの為に歌うようになったという語りがあった（図８）。いつものライブ後の打ち上げでは真面目に音楽について語り合うことはなかったが，今回，他メンバーの考えを知ることができたので，今後の音楽活動に影響を与えるかもしれないとういうコメントもあった。

図７．「音楽と語り」の様子

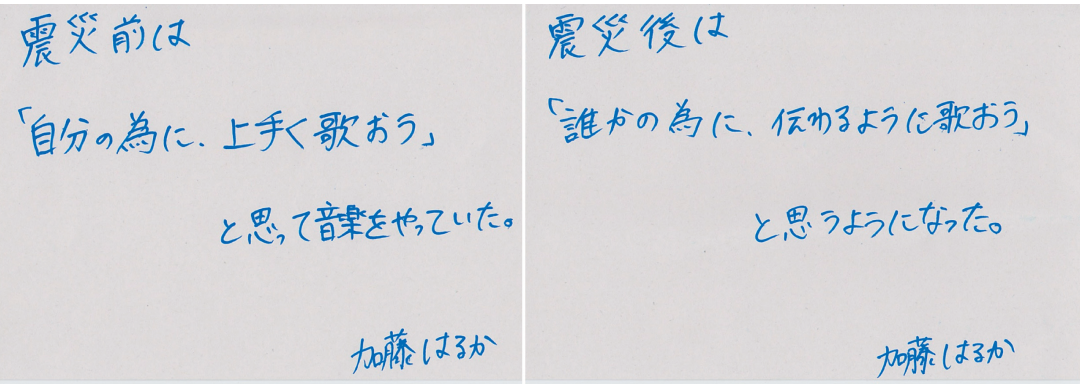

図８．アーティストのカード，震災前（左）と震災後（右）

2.5.「第 31 回メル・プラッツ公開研究会」

テーマ：メディアの森はどうあるべきか：ポスト 3.11 の語りと記憶から
日　時：2011 年 12 月 10 日
会　場：東北大学大学院情報科学研究科（宮城県仙台市）
主　催：メル・プラッツ（http://mellplatz.net/）
共　催：語りと記憶のプロジェクト，Media Exprimo，「社会システム＜芸術＞とその変容」（科研費）
参加者：メディア関係者およびメディア研究者他
内　容：東日本大震災におけるメディア体験をふり返り，語り合うことを目的としている。参加者はチャートにより４つのタイプに分かれ，８つのグループで「あのとき，こんなメディアがほしかった」ということについて，メディア体験をカードに書いた（図８）。それらのカード（図９）を「マクロ・メゾ・ミクロ」の３つのキーワードで捉え，カードを配置しながら語り合った。カードの総計は 147 枚（50 人）。これらの発表を踏まえて登壇者から，さまざまなメディアのあり方についての議論がなされた。

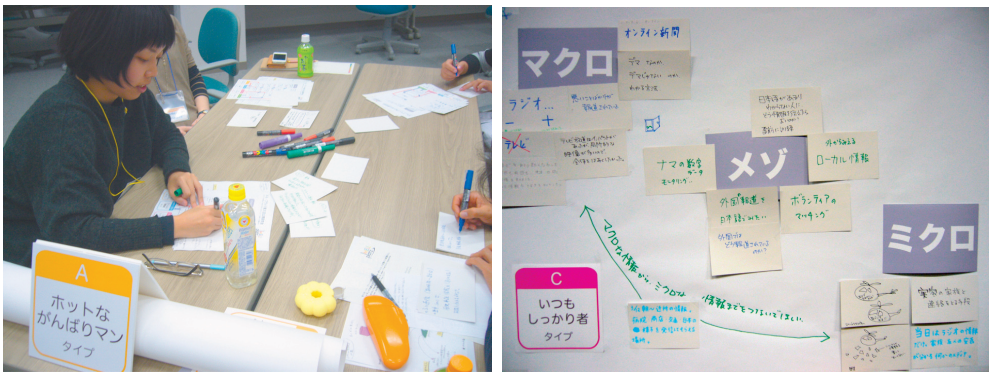

図９.「第 31 回メル・プラッツ公開研究会」の様子

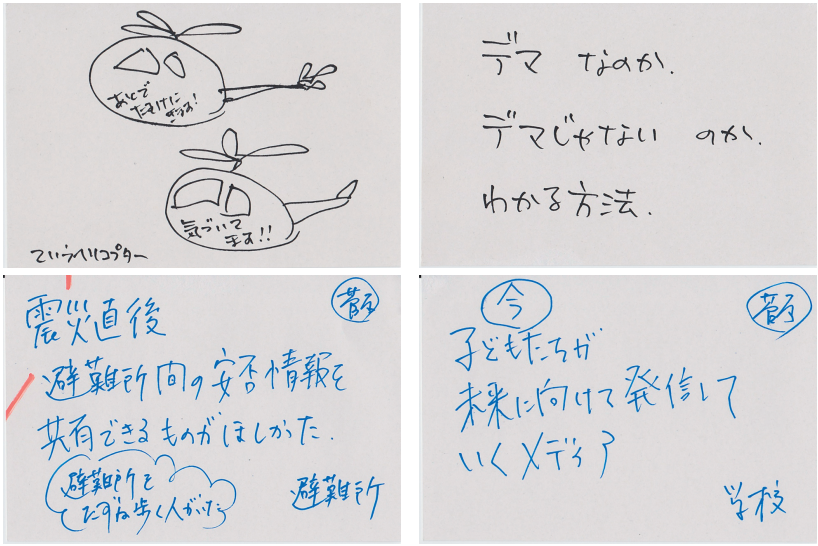

図 10.「あのとき，こんなメディアがほしかった」について書いたカード

2.6.「東北工業大学クリエイティブデザイン学科卒業制作展」内

テーマ：あなたがつくったもの，あなたがつくりたいもの
日　時：2012 年 2 月 17 ～ 22 日（6 日間）
会　場：せんだいメディアテーク（宮城県仙台市）
主　催：東北工業大学ライフデザイン学部クリエイティブデザイン学科
参加者：来場者およびクリエイティブデザイン学科学生
内　容：東北工業大学クリエイティブデザイン学科卒業制作展の堀江研究室展示ブース内で，前述 2.1. ～ 2.5. の活動内容の展示を行った（図 10 左）。展示を見た来場者に，「あなたがつくったもの」と「あなたがつくりたいもの」をテーマに，それらに関するモノ・コトをカードに書いてもらい，それについてスタッフに語ってもらった（図 10 右）。カードの総計は 100 枚。来場者は日常生活についてのカードを書き，卒業制作展に出展している学生は，作品や今後の創作活動について語っていた。

図 11.「東北工業大学クリエイティブデザイン学科卒業制作展」の様子

図 12. つくったもの（上段），つくりたいもの（下段）

2.7.「LE JAPON 11 MARS UN AN APRES」内

テーマ：日本から来た「語りと記憶のカード」への返信メッセージ
日　時：2012年3月10～16日（7日間）
会　場：ESPACE EVOLUTION（パリ）
主　催：非営利団体 Hug Japan（http://hugjapan.jp/）
参加者：来場者
内　容：被災地支援活動のために開催されたフランス・パリでの Hug Japan 主催の展覧会において，前述2.1～2.5のカードから抜粋したものを地の上に貼付け，展示した。カードを観た来場者は，その中で気になったカードへの返信メッセージをカードに書く。共感したこと，自分自身のための参考にしようと思ったことを書いてもらった。フランス国内から日本をみたときの視点を踏まえてもらい，できるだけフランス国内の事例も引用してもらうようにした。カードの総計は33枚（展覧会来場者2,400人）。

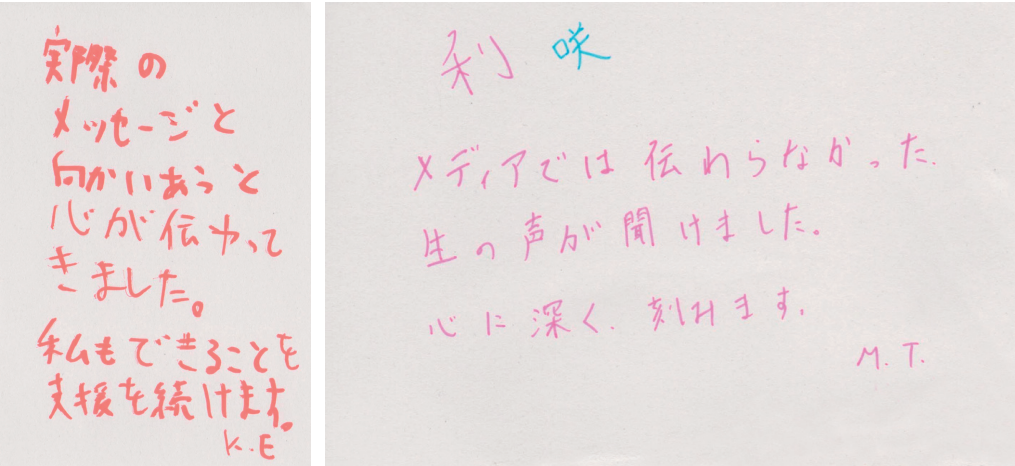

図13.　カードに書かれた返信メッセージ

3．今後の展望

平成23年度日本デザイン学会秋季企画大会「デザインに何ができるか1995.1.17～2011.3.11～」（2011年11月12日，東京大学）での学生･震災プロポジションでのポスター発表と，パネルディスカッション「デザインに何ができるか」で登壇した際に，参加者の方から「東日本大震災の被災者の，メディアでは取り上げられていない生の声を知ることができた」といった反響をいただいた。それが前述2.7.のパリでの展覧会での展示に繋がった。さらに，パリでの展覧会での来場者からも，返信メッセージとして反響を頂いた。これらのことから，本プロジエクトの語りのアーカイブの必要性を再認識した。

2011年度の「語りと記憶のプロジェクト」の Web サイトでは，活動報告としてレポートを掲載しているにとどまっている。そこで，2012年度中に，すべてのカード（456枚）をアーカイブする予定である。各回でテーマと地が異なるため，それぞれにあった表示の方法をデザインする。加えて，とても大切な，カードの作者の語りの内容を，カードと一緒に読んでもらうための工夫をする必要がある。この語りのアーカイブを通して，人間活動の基盤となる関係性やコミュニティなどを見直し，次世代へとつなぐ役割を目指したい。